

座長集約

横浜栄共済病院 高橋 光幸

神奈川 MRI 技術研究会において、会発足後初めて、安全性に関わる講演が行われました。今までは、撮影技術および臨床の話をクリックアップし講演依頼をしてきました。しかし時代の流れでしょうか？安全面を配慮した講演ということで、世話人全員の意見が一致。日本医科大学付属病院 土橋俊男先生に講師依頼する運びになりました。先生は長く、MRI に携わってきた方です。ですから、とても説得力のある講演内容でした。先生の講演を聞きながら、自施設との比較をされ、身の引き締まる思いをされた方も多かつたのではないかと思います。私もその一人です。先生は、技師長になられてからも安全面に関する様々な検討をおこなっているということでした。特に強調されていたことは、皆様の施設においても、時間があれば、インシデント、アクシデントレポートのデータをとり、自施設のどこに危険が潜んでいるのか、分析することが重要であるということでした。金属持ち込みの事故事例や、自施設のインシデント例など、具体的に事例を提示され、原因がどこにあるのか解説していただきました。この事例の紹介の後で、先生は強く、検査室の窓は絶対開き放しにしない。ということを強調されていました。当院でも検査室のドアを開き放しにして、医師、看護師（ベッドをそのまま検査室に持ちこもうとした）、看護助手（車イスをもちこもうとした）が勝手に検査室に入室しようとするインシデントがありました。そこで、MRI スタッフには、必ず検査室のドアを開き放しにしないということを第一に徹底しています。先生と全く同じ意見でしたので、少々驚きました。先生の事例では、操作室と検査室のドア 2 枚構造の事例でありましたが、当院では 1 枚構造なので、こういった構造状の違いによる背景もあるということを確認させられました。先生は繰り返し、検査室内に技師が一人もいなくなる状況は作らないことを強調されていました。クエンチは、突然発生する可能性があることを常に頭においておかなければならない。マニュアルを作成し、担当者は勿論、当直中においてもマニュアルに沿って対応していくことが重要であるということでした。体内金属および、手術などのデバイスによる MRI 検査の可否に関しては、私を含め、会員の最大の関心事です。先生は、最大限情報収集にあたるということでした。添付文書は必ず確認。こういった確認できた情報のファイルを共有かするしくみも考えているということでした。Z ステントに使用されているステンレスは、オーステナイト系の SUS304 というタイプで、日本工業機規格（JIS）で弱磁性と分類されています。しかし、高磁場（1.5T）において、加工法によっては、かなり強い吸引力を認めることから、注意が必要（先生は禁忌にすべき）であると報告されました。われわれ検査する技師は常に MRI は危険であるという認識のもと、常に新しい情報を収集し、検査を施行しなければならぬと改めて思いました。